

あなたを手離さない

丸山 勉

【聖書】 創世記3章1節～10節

「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

【序】 神様の招きの言葉「どこにいるのか」

先ほど読んで頂いた創世記3章9節の言葉ですが、今日、この礼拝でも神様は私たち一人ひとりに問うています。「どこにいるのか」。口語訳では「**あなたはどこにいるのか**」となっていました。この言葉はとても深いと思います。けれども考えてみると不思議な言葉です。場所を聞くだけなら神様はそんなことを尋ねる必要はありません。この時、地上にはたった二人の人間しかいないのです。それでも神様はアダムを、また初めの女性(後に「エバ」と命名)を捜しています。今この時も、九州北部の豪雨の行方不明者を救助者が一生懸命に捜しているように、神様は、最初の人間たちが自分のもとに帰ってくるように捜しているのです。「どこにいるのか」？あなたは私を離れ去ってどこに行くのだ？——これは一面厳しい神様の「**裁く**」言葉とも言えるでしょう。けれども、断罪の言葉ではありません。決してそうではありません。これは、罪人である人間——私たち一人ひとり——を、御もとに引き戻そうとする、神様の懸命な「**招き**」の言葉ではないでしょうか。

【1】「罪」の起源

神様のもとを離れ去った人間——。なぜ、そのように人間は罪に堕ちてしまったのでしょうか？創世記はその罪の起源を語ります。この神話的な物語は自分の実存とは関係がないと思われるでしょうか。しかし、聖書の言葉はいつもそうですけれども、まずは自分の心をまっさらにして、ここから私に神様が何を語りかけて下さるのか、虚心坦懐に聴こうとするなら、神様は生きておられますから、必ずそこから今の自分に深く語って下さいます。私はそう信じます。

ここでいつも疑問として言われるのは、なぜ神様は、創世記 2 章で「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」などというような木をこの園の中央に置いたのか、ということです。しかも「その木の実は美味しそうに見えた」と 3 章では書いてあります。そうであるなら、神様は意地が悪いのではないか、初めからそのような木は置かなければ良いのに、それで食べてしまってもそれは神様の責任ではないか、と私たちは言いたくなります。しかし、私は思うのですけれども、「交わり」というのは、ルールがないと交わりにならないのではないのでしょうか？「ここまでは踏み込んでいいけれども、ここから先は行ってはいけない」ということは普通のこととしてあります。たとえば良くありませんけれども、例えば教会堂のお隣にあります加藤牧師の牧師館に、誰かが、外は暑くてたまらないからと無断でシャワーを浴びたり、お風呂に入ったり、自由に出入りするなどということは考えられません。それは非常識なことです。誰も、自分の生活は守られなければなりません。そこに入り込んでくるのは強盗と同じです。

それと同じようなことを人間は、神様との関係でしてしまったのではないのでしょうか。創世記 2:16 で、「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい』』と言いました。素晴らしい「自由」を与えたのです。そして 2:17 では『ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう』』と言って、人に「制限」を与えました。何故でしょうか。私たちは神の「被造物」だからです。つまり、私たちは神様があってこそその存在、私たちはいくら頑張っても、無から有を造り出すことは出来ません。しかし神様は、私たち人間を、土の塵から、その鼻に命の息を「フーッ！」と吹き込み、ご自分の似姿に、言葉を持ってではなく、直(じか)に造って下さったのです。私たちの命の尊厳は、神様の似姿であるからこそ、尊厳を持つのです。いや、それを「与えられている」のです。ですから、命の与え手である神様と人間との間には、初めから明確な境界線があります。この園の中央には「善悪の知識の木」と、さらに「命の木」が立っていました。これは言うてみれば、人間が脅(おびや)かしてはならない神様の世界に属する「神様の家の庭」の木です。その神様の所有物に、強盗の様に手を伸ばすという考えは、アダムも女(エバ)も、初めは全く頭の中になかったと思います。

[2]神様の言葉の背後にまわりこむ人間

しかし、悪魔(サタン)は、実に巧妙に人の心の中に入りこんでくるのです。賢い蛇は、エバに語りました。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」。これは実に巧みな言葉ですね。それまでの神様と人間の関係は、単純な主・従の関係でした。人間は神様の言葉のもとにだけあって、何の不満も疑いもない命を生きていました。そこに、今まで聞いたことのない新しい誘(いざな)いの言葉が聞こえてきたのです。それは「本当に神様はそう言われたのですか」ということです。単純な主・従関係、またそこにあった深い信頼関係に、疑いを人間は抱くようになったのです。「もしかしたら、ただ神様に聞くなどという生活は間違っていたのかもしれない」と。ディートリッヒ・ボンヘッフアーという 20 世紀ドイツの牧師・神学者は、ここで人間は「神様の言葉の背後にまわりこむ罪」を犯すよ

うになったと言います。神様が人間の審判者である、ということを逆転させて、人間が神様の言葉の審判者になったというのです。主客転倒です。人間が神様の言葉を取捨選択するのは。都合の良い言葉には耳を傾けますが、罪を指摘する様な痛い言葉には耳を塞ぎます。昔の話ではありません。私のこと、あなたのことです。

そのような、罪に堕ちた人間は何をしたのでしょうか？ 思い起こして下さい。ただ人を愛し、神様の言葉を語りながら地上を歩んだあのイエス・キリストを人は殺してしまいました。それも蛇の誘惑です。素直な心で神様の言葉に傾聴することを捨ててしまった人間の姿です。福音書を見ますと、イエス・キリストに対して人々は「お前が本当に神の子なのか？ 十字架から降りて来い。そうしたら信じてやろう」と言いました。現代でもそうです。聖書は本当に神様の言葉なのか？ 本当に神様は愛なのか？ 本当に神様は私と共におられるのか？ 本当に罪は赦されるのか？ 本当に復活の命はあるのか？ 本当に信じて良いのか？ 本当に？ ——人間はこのように「神様の言葉の背後にまわりこむ罪」に陥ることによって、平安を失うのです。これが「善悪の知識の木」の実を食べてしまった私たち人間の姿です。

[3] 捜し、追いかけてくる神様

しかしです！ そのように人間の側から神様との関わりを失ってしまった私たちを、神様の方がその関係を切らずに追いかけてくるのです。

創世記 3:8 以下です。「その日、風の吹くころ」、これは直接的には涼しい風が吹く夕刻のようですが、その時「主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた」と記しています。歩く音が聞こえるというのはどんな響く音だったのでしょうか！ ここで神様は単なる霊的な存在ではなく、足をもって人間を捜されるお方として描かれています。この続きはこうです。「アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか』」。アダムと女(エバ)は、いつしか神様の顔を避けること、神様から隠れることを覚えてしまいました。これが所謂、人間の「良心」なのだと思います。「自分は神様に合わず顔がない」という認識です。「良心」は良い心のようにも思っていますが、しかし、それは自分が主人公であり、自分で自分を治めると言うことに繋がります。「罪の始末は自分で刈り取りなさい」と、良心の声は私たちを追求します。しかし、本当に自分で自分の罪を刈り取ろうとしたら、私たちはどうなってしまおうでしょうか？ 自分で自分を抹殺(自殺)することにもなりかねません。

『あなたはどこにいるのか？』、これは厳しい言葉でしょうか？ 確かに厳しさを持っています。あなたを逃しはしないということですから。けれども、だからこそ救いの言葉です。神様は私たちを諦めない。放置しておかない。実は私たちは皆この地上で「迷子」になってしまったのです。迷子になってしまった愛する子を放置する親はいないでしょう。まことの親である神様はなおさらです！ あなたが私から離れようとしても、私はあなたを手離しにしない。私があなたを造ったのだから！ と。優しい風の吹くころ、神様は正に聖霊の風の中で、私たち一人ひとりを探し求めていらっしゃるのです。詩編 23 編にもこのような言葉があります。

「命のある限り恵みと慈しみとはいつも私を追う」(23 編 6 節)。

恵みと慈しみが、まるで足を持つように私たちを追いかけてくるのです。

或いは詩編 139 編にも、慰め深い言葉があります。

「どこに行けばあなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうともあなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうともあなたはそこにもいまし、御手をもってわたしを導き右の御手をもってわたしをとらえてくださる」。(139 編 7-10 節)

私たちの人生には、神様の御手から滑り落ちてしまうような場所は、実はどこにもないのだ、と言うのです。

[4]神様の声そのものである主イエス・キリスト

『あなたはどこにいるのか』と神様が最初の人間に語りかけた声。この声は、創世記 3 章 9 節だけではなく、聖書全巻に響いていると思います。

「今、あなたという存在はどこにいるのだ？」——それは例えば出エジプト記やサムエル記等の歴史書にも、エレミヤ書やイザヤ書等の預言書にも、また詩編にもヨブ記にも、聖書の中のどの書物にも響き渡っているのではないのでしょうか？

そして私たちは、新約聖書を通して知らされています。この『あなたはどこにいるのか』という神様の招きの声が、具体的に肉体を取って来られた方がいらっしゃるということ。

そのお方こそ主イエス・キリストです。旧約聖書では神様は御顔をお見せになることはありませんでした。しかし、時が満ち、あのベツレヘムの馬小屋で、肉体を持たれた神の御子が、私たちの世界に生まれたのです！旧約聖書が指さす「預言」の「成就」です。これは文字通り、世界史の中の最大の出来事です。

そして、このお方の別の名は「インマヌエル」、「神我らと共に」です。すなわち、あなたを決して手離さないのだ！という神様のご決意が、人の子のお姿をお取りになったのです。「限界」を持たない方が、敢えて人間としての「限界」をその身に引き受けられたのです。だから彼は、主イエスは、本当に苦しみました。人間が受ける、ありとあらゆる誤解、偏見、憎しみ、それを一身に身に受けられました。考えてみれば、主イエスは神様の力を用い、神様に立ち帰ろうとしない人間とこの世界に見切りをつけ、滅ぼすこともお出来になったに相違ありません。しかし主は、ご自分が「審かれる者」として架かられる十字架を背負い、黙々と歩んで行かれました。創世記で「主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた」とありましたけれども、今、私たちにも聞こえているのでしょうか？ 私たち一人ひとりを捜すために、神様の御もとへと連れ帰すために、その足をもって、ゴルゴタの丘への道を歩まれる主イエスのひと足ひと足の足音が。それは本来ならば、罪に堕ちた私たち一人ひとりが神様に審かれなければならないその審きを、替わって受けて死んで下さるために歩みを進められた一步一步です。

[5]神様の前に裸で出よう！

7/15 の土曜日に浦和教会で、連盟の宣教研究所の主催で「礼拝式文」を用いた礼拝

のあり方についての研修が松見俊先生を講師として開かれ、多くの方が集まりました。私自身も参加し、伝統的な礼拝式文に学ぶこと、また祈祷文などの洗練された祈りの言葉に祈りを教えられることは重要な事だと思いました。カトリック教会や聖公会、またルーテル教会の礼拝に出ますと、礼拝の初めの方で必ず「キリエ」と「グロリア」を歌います。「キリエ」とは、罪の悔い改めである「主よ、憐れみ給え」、「グロリア」とは栄光の賛歌「神に栄光あれ」です。礼拝の中の重要な要素と言えます。そして「キリエ」と「グロリア」は表裏一体です。悔い改めがない讚美はなく、主の讚美につながらない罪の告白もないのです。

創世記の3章で、最初の女性(エバ)が蛇に誘惑された時の誤りは、蛇の言葉の方を信じて、神様の言葉の方を捨てたことです。その誘惑の時、エバは神様に直接聞けば良かった。「蛇がこんなことを言っています。あなたの御心はそうではないのではないのでしょうか」と。またアダムも「どこにいるのか」と尋ねられた時、こう言いました。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから」と。これは言い訳のように聞こえます。神様の前に立つ誠実な態度ではないと思います。彼はこの時、「私はここにおります。私はあなたに罪を犯しました。主よ、憐れんで下さい」とだけ言えば良かった。エバにしてもアダムにしても結局、自分と神様との関係ではなく、蛇のせいだ、一緒にしてくれた女のせいだと責任を転嫁しています。これでは神様の前に無責任です。＜信仰＞というのは、個として神様に前に立つことです。ある意味、孤独になることです。神様の声を、この私に語られている声として聴くことです。

私は、本日の御言葉の主題から、ルカ福音書 15 章の「放蕩息子のたとえ話」を思い起しました。私はどちらかと言うと、あの放蕩息子の兄の姿に自分を重ねて考えてしまうのですけれども、この兄は、放蕩息子である弟が帰って来、喜びに溢れた父親が開いた盛大な祝宴に入らず、家の「外」にいました。面白くない訳です。しかしその兄を救ったのも父親でした。「兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた」(15:28)とあります。家の戸口のそばに立っている兄に、父親の方が近寄り、声をかけられたのです。創世記の「あなたはどこにいるのか」が、ここにもあると思いました。その父親に向かって兄は言いました。「わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる」(15:29-30)。文句たらたら言葉です。しかし何と率直な言葉でしょうか！ここにはウソのない裸の心があります。私はこれが大事なのだなと思いました。他の誰でもない、神様ご自身に訴えるのです。そして神様ご自身に聞くのです。神様は求める者に、必ず御心を示してくれるに相違ありません。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ」(15:31)。ここでも「インマヌエル」、神が罪人である私たちを赦し、しかも共におられる、という揺るぎない真実が語られています。

[結]「悔い改め」と「感謝」を主に

罪人である私たちが神様の前に裸で進み出る時に出てくる言葉は「主よ、憐れみ給え」以外ではありません。けれども、その時私たちは知るのではないのでしょうか。神様はこのような私たちを「あなたはどこにいるのか」と追い求め、捜し出し、そして見出して下さって、あのイエス・キリストを通して、私たちの存在をしっかりと御腕の中に抱え込んで下さっているということ！ だから安心して、しかし誠実に、神の前に立つ人間として罪を悔い改めたいと思います。そして、神様の赦しを確信したのなら、心一杯に「グロリア」、**神様への感謝の讚美**を捧げたいのです。

今日の礼拝の招きの言葉で読んで頂いたパウロの言葉こそ、今礼拝を捧げている私たちの心そのものではないのでしょうか。

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします！」
(ローマの信徒への手紙 7:24-25a)

[祈り]

主イエス・キリストの父なる神様、御名を讃えます。

惨めな者であります。でもこの惨めなまま、罪人のまま、あなたに向かい合うことが許されていることを深く感謝致します。

あなたは私たちの手を決して手離すことはないお方です。私たちの死の床にあっても十字架の主が私たちを支えて下さいます。いえ、死の向こう側でさえも、復活の主が私たちの手を取り、本来の豊かなあなたとの交わりの中へ回復を与えて下さいます。そこへと向かう地上の命を、私たちは主イエスと共に歩んで行きたいと思います。主よ、憐れんで下さい。そして、主よ、あなたの御名を讃えます。

この新しい一週間も、あなたの御声を聴き損なうことが無いよう、私たちを守って下さい。ここに居る者、また私たちがいつも祈りに覚えている一人ひとりに、あなたの平安をお与えください。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。アーメン。